# 変わる日本の「暮らし」と「まち」

## 地域に溶け込む新しい災害公営住宅をつくる

**熊本県宇城市 災害公営住宅整備事業**（2017年●平成29年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

2016年4月に熊本県と大分県を襲った熊本地震。4月14日の前震から息つく間もなく、16日には最大震度7の本震が発生。県のシンボルでもある熊本城が被災した姿は、大きな衝撃を与えた。

数多くの余震を含む、一連の地震活動の多くの震源となったのが、熊本県宇城市だ。熊本県の中心に位置する交通の要所の一つであり、トマトやメロンなど農業も盛んな熊本市のベッドタウンである。

昨年の12月に訪れた宇城市は、屋根に青いブルーシートがかかった家や倒れたままの墓石、仮設住宅など、地震の爪痕が垣間見える。取材に訪れた宇城市役所のロビーも壁のタイルが剥がれ落ち、当時の惨状をいまに伝えている。

守田憲史宇城市長に話を聞いた。

「熊本でのあの規模の地震は観測史上初でした。宇城市は多くの余震の震源だったこともあり、ボディブローのように被害が及んでいます。我々職員も家が全壊するなどの被害に遭いながら、震災から1週間以上も市役所の床に寝泊まりしてさまざまな業務にあたっていました。あれから2年半以上が過ぎ、ようやく少しずつ落ち着きを取り戻しつつあります」

そんな取材を終えた後の、1月3日。またしても、熊本県で震度6弱の地震が発生。不安な日々は依然として続いている。

陽射しがいっぱい入るLDKとうれしい縁側のある災害公営住宅。

### 地域に開かれた災害公営住宅

宇城市では、現在も約300世帯もの人々が、仮設住宅やみなし仮設住宅に入居している。仮設住宅の入居期限である3年の期限が迫るなか、市では希望者全員が入れる200戸を目途に災害公営住宅の整備に力を注いでいる。

その大きな支えとなっているのがURだ。市と2017年2月に基本協定を結び、一体となって復興事業に取り組んでいる。

「我々職員だけではマンパワーが足りないうえに、未曾有の災害に対する知識も経験もありませんでした。そんななか、東北などでの震災復興経験が豊富なURさんに引き受けていただき、スピーディに復興が進んでいるのは、本当にありがたい」と守田市長は語る。

一刻も早い整備が求められるなか、工事を迅速に進める秘策となったのが、基本設計から各種申請、工事の発注から現場監理まで全てのことをURが一括して執り行う受注、いわゆる買取方式だ。完成した住宅を市に譲渡するもので、マンパワー不足の宇城市の大きな助けとなり、整備期間も大幅に短縮した。

現在、宇城市でURが建設している災害公営住宅は2か所。そのうち、2月に入居が始まる豊野町響原地区を訪れた。見晴しのよい高台に建つ災害公営住宅は全20戸。基本コンセプトは、団欒の住まい、団欒の庭。全棟南向きで、地元産の木材を使った温かな外観が印象的だ。

一歩中に入ると、南側に面したリビングには、高い位置に配した明り取り窓から光が降り注ぎ、壁や床、梁には地元の木材を使用し、明るく開放的な雰囲気だ。特徴的なのは、リビングにつけられた濡れ縁だ。家族の団欒だけでなく、庭を介して隣人との団欒も生む仕掛けになっている。内覧会では「新しくて気持ちいい」「すぐ目の前の高齢者施設におじいちゃんが通っているので、近くて便利」など、喜びの声があがった。

響原地区災害公営住宅のもう一つの特徴が、「くまもとアートポリス」事業を活用していることだ。コミッショナーである建築家の伊東豊雄氏が指名した設計事務所（シーラカンスK&H）が、URと協力し、地元の木材を活かしたアーティスティックなデザインの集会所「みんなの家」、「みんなの広場」を設計。周囲の方々との交流を生むコミュニティのシンボルとしての期待も担う場所になっている。

### 熊本ならではの復興を目指して

取材当日、最終検査が進む住宅で、入居予定の65歳の女性に出会った。遊びに来た友人を連れて見に来たと言い、「南玄関で日当たりもいいし、窓が大きいのがいいわね。庭も広いから、花とか野菜でも育てようかしら。2月の入居が楽しみ」と話してくれた。

「熊本県では、URは宇城市のほか益城町、嘉島町、御船町において、計12地区453戸の災害公営住宅の整備をしています。たくさんの期待に応えていきたいですね」と語るのは、UR熊本震災復興支援室の船渡川基嗣だ。岩手県大船渡市などで震災復興を経験した後に熊本に赴任したが、東北とはまた違う苦労があるという。

「東北は全面的に被害にあったため、市や町も復興第一で取り組み、まち全体で災害復興に向かう空気でした。一方、熊本には被災されていない方もたくさんいらっしゃる。特に宇城市は、面でなく点での被害なので、全面的に新しいまちをつくることはできませんし、国の補助制度なども違いがあります。東北での手法が通用しないため、ここならではの復興を探りながら、徐々に調整していく難しさがあります。けれど、被災された方々の住宅を早急に作るという使命は同じ。全力で取り組んでいます」

1月からは、もう一つの災害公営住宅「松橋町大野地区」の工事も始まった。来年2月の完成をめざし、RC3階建27戸の建設が急ピッチで進められている。

「新しい住宅が建ち、実際にみなさんが入居するのを見るのが何よりの楽しみ。それはどこでも、どんな現場でも変わりません」と船渡川。熊本の人々が心から安心して住める新しいまちづくりに向かって、奮闘の日々は続く。

**図書カードプレゼント**

本連載に関するアンケートを行います。ご参加いただいた方の中から、抽選で10名様に図書カード3000円分をプレゼントします。

詳細は次ページをご覧ください。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

［企画制作］新潮社